

次に allen の式では 0.32 であった比例定数を算出重量と真の重量に対する誤差の平均が最小になる様に求めて求めた所、その値は 0.23 となった。そしてこの値から甲状腺重量を算出しその真の重量に対する誤差を求めた所、35.5% になった。

一方各医師の各症例に対する面積と長径の測定値の平均偏は、面積では 8.5% 長径では 4.3% でありこれが重量算出に及ぼす影響は約 26% であり、これだけでは 35.5% の誤差を説明する事は出来なかった。

以上から各研究室によりスキャンナの感度が一様でない為、今回我々が行ったごとく allen の式から甲状腺重量を算出する際は、各研究室で独自に比例定数値を決定すべきである。

11. シンチグラフィーが診断上有意であった

甲状腺腫 3 例

○片岡 誠 永井 良治 角岡 秀彦

岸川 輝彰 小林 俊三 岸川 博隆

(名古屋市立大学 第 2 外科)

我々はシンチグラフィーに興味ある所見を呈した甲状腺腫例を供覧した。

症例 I 29 歳 2 児の母

3 年半前より前頸部に腫瘤あり、来院時には 4.5~6.5 cm に達していた。シンチグラフィーの結果、hot nodule を示したが、甲状腺末投与による甲状腺抑制試験、及び抑制時シンチグラフィーを行うも自律性は確かめできなかった。

症例 II 13 歳 女子

生後 3 年より前頸部に腫瘤のあるのに気付き今日に至る。他医にて粉瘤、正中頸部嚢胞の診断を受けたが、シンチグラフィーの結果、subhyoid median ectopic thyroid と診断した。血管造影の結果も考え併せ、腫瘤の正中切断各々左右外側下方へ移動固定することにより、cosmetic な意味からの治療をこころみたい。

症例 III 61 歳の男子

43 年より前頸部の腫大が見られ、シンチグラフィーの結果両葉 RI 欠損像あり、45 年 5 月右葉切除、病理組織診断の結果橋本氏病とされた。ところが 45 年末より残した左葉が腫大し、47 年 4 月には 7.0~5.5 cm と増大し、¹³¹I 摂取率は 0.34% と全く低下、シンチグラム上 RI 集積は全く認められなくなった。47 年 6 月 7 日

左葉切除を施行した所病理結果では、reticulum cell origin か epithelial origin か判別し難い悪性腫瘍像を呈していた。本症例は橋本氏病から reticulum cell sarcoma の発生を見たと考えるか、又は初回手術時より reticulum cell sarcoma の病像が存在したか、第 1 回手術時とは全く別個の epithelial origin である末分化癌が発現したか、病理学的に興味ある症例であった。

質問： 鈴木 豊 (金沢大学 核医学)

1) 摘出後スキャンを実施しましたか。

2) Autonomous と考えてよろしいですか。

回答： 片岡 誠 (名古屋市立大学 第 2 外科)

1) 術後スキャン施行しておりません。

2) 検査法に問題が残る hot nodule とは言えるが Autonomous とは言い切れないと考えている。

12. 連続唾液腺シンチグラフィーの唾液腺機能検査としての価値

○興村 哲郎

(金沢大学 放射線科)

利波 紀久

(同 核医学科)

^{99m}Tc-pertechnetate は、唾液腺からも排泄される性質を有するので、この性質を利用して唾液腺機能検査を行った。

シンチカメラを使用し、^{99m}Tc-pertechnetate 3 m Ci 静注後、10 分、20 分、30 分、40 分、50 分、60 分、90 分、120 分とその後レモン片を投与し、唾液の排泄をうながした後含嗽を行い、口腔内の activity の洗滌後の合計 9 回、正面及び両側面の 3 方向より撮像した。

結果は、activity は静注後 30 分でほぼ最高に達し、その後 120 分迄はあまり変わらず、レモン片投与後に唾液腺の activity の低下がみられた。機能低下が存在する場合には、activity の最高に達する時間が遅れ、更に activity 自体も低かった。時間的な差については、唾液腺の機能に左右差がある時には特に明瞭にみられた。

しかし、唾液腺機能の僅かな差には、この方法では十分とは言えず、何らかの方法によって定量的に測定する必要を感じた。また、排泄管に閉塞がある場合には、レモン片の投与後も activity の低下はみられないであろうと言う事は想像に難くない。

追加： 金子 昌生 (名古屋大学分院 放射線科)